

原著 (Article)

# 匿名性による学びを越える新たな学びのステージとしての大陸間教育へ向けて

——グローバルイシューの問題解決の学習を通して——

**Towards Intercontinental Education as a new learning stage beyond the study by anonymity—Through learning of the problem solution as a global and local issue—**

宇土 泰寛\*  
UTO, Yasuhiro\*

## 摘 要

国際理解教育、グローバル教育での学びにおいて、多様な方法が開発され、取り入れられてきた。しかし、学びの場である学びのステージは、世界の匿名性の知識を集め、教室の中で学び合うという国内に留まるものであった。今日、ICT（情報通信技術）の発達やトランスナショナルな活動が顕著になる中で、国境を越え、各大陸の子どもたちが現地から伝える実名性の情報をもとに教育を展開することも可能となってきた。

**キーワード：**匿名性、大陸間教育、グローバルイシュー

**Key words：**anonymity, Intercontinental Education, global and local issue

## 1. はじめに

現在は、モノ・カネ・情報が国境を越え、人も国境を越えて行き来する時代、つまり、グローバル化と多文化化が並行して進む地球時代に突入している。そして、今、「グローバル人材」の育成が声高に叫ばれ、多くの国際教育や英語教育関連の研究大会でもテーマとして設定されている。確かに、グローバル人材は、産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2011年4月）によって、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」との定義がなされている。

このグローバル人材の育成に深く関わるのが、国際理解教育やグローバル教育と言える。

戦後、ユネスコから始まった国際理解教育は、様々な社会状況や国際動向と関わりながら、平和教育、開発教育、異文化間教育、多文化教育、グローバル教育など、多くの実践を創り出してきた。同時に、1990年代半ばの欧米のグローバル教育等の影

響からアクティビティやディベートなど学びの方法論においても、知識伝達型の一斉授業のスタイルをいち早く変革し、展開する役目も担ってきた。

しかし、地球意識形成やグローバル 이슈に積極的に取り組んだグローバル教育や国際理解教育において、学びの内容、方法とも大いに変化を遂げてきたが、グローバル 이슈をホームページや本で調べたり、教室の中で討議したり、発表したり、あるいは、シミュレーションで疑似体験をしたりする学習等が中心で、学びの場である学びのステージは、世界の匿名性の知識を集め、教室の中で学び合うという国内に留まるものが多かった。しかし、ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) の発達や国境を越えて行き交うトランスナショナルな活動が顕著になった現在、匿名性を越える実名性による新たな学びのステージを創出することが可能となってきたのである。

そこで、今回、グローバルな課題であり、ローカルな課題でもある、つまりグローバルな問題を扱いながら、日本とオーストラリア、ブルキナファソ、フランスの学校が取り組んだ大陸を越えた教育活動を考察し、「学びの内容」と「学びの方法」の2つの視点と同時に、「学びのステージ」という3つ目の視点から、学びの場そのものが国境を越えて拡大し、そこでの様々な地球上の課題から、新たな学びの可能性へと誘う「大陸間教育 (Intercontinental Education)」に向けた考察を行いたい。

## 2. 国際理解教育・グローバル教育の展開と学びのステージの課題

戦後の平和の希求としてのユネスコからの展開、1974年のユネスコ国際勧告、80年代の海外子女教育・帰国子女教育、そして、異文化間教育、90年代の欧米からのグローバル教育や外国人児童生徒教育からの多文化共生教育、ゆとり教育批判や総合学習の衰退、英語活動への集中、最近ではESDとの関わりの中でのユネスコスクールの展開など、時代の変化への対応として、国際理解教育やグローバル教育が時代と共に、様々な実践を創り出し、多様な学びの方法も生み出してきた。

これらの教育の特徴は、人間を中心に据えた、地球志向の学習と言え、従来の教育・学習スタイルでは、内容を地球的なものにしても目標に到達できるものではなく、その方法論も重要視しているのである。その理由について、セルビー [David Selby] は、「手段はメッセージ」を持ち、潜在的なメッセージを子どもは受け取るからと述べている<sup>1)</sup>。

このように態度形成を非常に重視した学習を志向し、そして、何よりも、教育内容の改革、教育機会の拡充といった従来の教育改革ではなく、教育のプロセスの改革を志向しているのである。

しかし、今までの教育は、その具体的な学びのステージという面では、国境を越えない。社会的な活動がものすごいスピードで国境を越えているのに対して、教育では、世界の情報は匿名性の知識や情報が扱われているが、具体的な人同士での国境を

越えた学び合いには至らない傾向が強かったのである。

それでは、第3の視点である学びのステージから見た時、どのような課題が浮かび上がるか検討することが、21世紀の教育実践においては重要であると考ええる。

### 3. 学びにおける匿名性の課題

世界的な教育動向や日本の国際化の状況を踏まえながら、地球時代の国際教育の独自なプログラム創出をめざし、ミード [G. H. Mead] の自己概念の研究とパーソンズ [T. Parsons] のシステム論をもとに、自己概念の拡大とグローバルな態度形成、教室の国際化を図るプログラム研究を行い、1990年に「宇宙船地球号プログラム」を開発し、実践した<sup>2)</sup>。

このプログラムは、情意的側面を重視し、出会いと役割取得をねらいとするシーンA、認知的側面を重視し、相互依存システムの認識をねらいとするシーンB、価値的側面を重視し、価値基準形成をねらいとするシーンC、技能的側面を重視し、仲間と共に協同的に進め、実践力の育成をねらいとするシーンDからなり、それぞれのシーンに、さらに小単元の授業が2時間から4時間のトピックで組み込まれ、全部で20時間からなるプログラムである。

この教育実践での大きな課題が、あるタイプの児童においては、自らを問う価値ジレンマも起こらず、態度形成に至らなかったということであり、長らく私自身にとっても大きな課題であった。この時の児童のタイプには、価値ジレンマになる場面の違いによって、4つのタイプがあった。認知的側面で、価値ジレンマに陥り、自らの新たな価値を見出した児童(タイプI)、シーンCの自己内省の場面で引き起こされる児童(タイプII)、集団でのディベートの場面で引き起こされた児童(タイプIII)、そして、どの場面においても知識習得だけで、価値ジレンマが引き起こされなかった児童(タイプIV)が見られたのである<sup>3)</sup>。この傾向は、ほかの授業場面でも多くみられることであり、特に、知識伝達型の授業が中心の日本においては、大きな課題となるのである。

この課題に大きく影響しているのが、授業で扱う情報の匿名性の問題であると考えた。ビデオでの現地の人の訴えも、知的理解として済ませてしまうのである。しかも、このタイプの児童は、いわゆる勉強はできる子たちであった。アクティビティなども多用し、学びの内容、学びの方法の2つの視点をフルに活かした授業においても、課題は残ったのである。現在、若者や子どもたちの「つながり感」の薄さが言われ、教育の現場でも「つながり」「つなぐ」はキーワードにもなっているように重要な課題となってきたのである。

そこで、グローバルな態度形成を図る学びの構造を相互作用の視点から考察してみたい。

グローバルな態度形成を図るには、自己概念の拡大と深化が必要であった。その契

機となるのが価値ジレンマである。価値ジレンマについては、L. コールバーグ [Lawrence Kohlberg] の認知能力と役割取得能力を中心とした道徳性認知発達理論によって研究されている。コールバーグは、役割取得を「自己と同じような存在としての他者に対して反応する傾向や、他者の役割にたって自分自身の行動に反応する傾向」とし、子どもの役割取得には、能力に合わせた役割取得の機会の重要性を述べている<sup>4)</sup>。この理論をもとに考えると、価値ジレンマを経験し、その不均衡を様々な情報収集や他者の役割取得によって解決していくことが、認知構造の変革を促し、新しい道徳的段階に進むと言うものである。確かに、タイプⅠとⅡの児童は新たな価値基準の形成へと進んでいる。価値ジレンマが起きなかったタイプⅣの児童にとっての他者とはどのような存在であったかが問題となるのである。

実は、グローバルな態度形成においては、役割取得すべき対象が、同一文化を持つ他者とは異なり、日常生活の準拠枠を突破せざるを得ないと言う独自の課題がある。そのために、自己と他者の相互作用を、日常生活から離れた存在との相互作用、あるいは、潜在構造をなし、無意識化された相互作用の関係になるという問題があるのである。つまり、社会的な相互作用とは、お互いの他者の認識と他者との関連における自己認識とによって、お互いに対応する意味を交換し合う過程である。

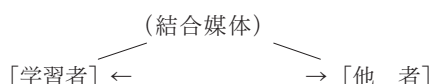


図1 学びの構造

しかし、この学びの構造の基本形は、媒体に関わる人が見えなかったり、媒体に関わる人の存在はわかるが匿名であったりすることがある。

この関係は、グローバルな態度形成には大きく影響し、シュッツが「他者についての経験は次第に疎遠で匿名的なものになっていく」<sup>5)</sup>と言うように、日常生活での準拠集団と違って、枠の拡大によって、媒体に関わる行為者が見えてこないのである。更に、相互作用のない、結合媒体だけの知識集積型の授業では、学習者はその媒体に関わる人の存在すら見えなくなるのである。

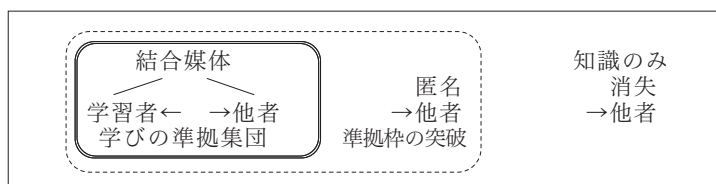


図2 学びの準拠集団と匿名性の他者、そして他者の消失

この問題は、役割取得能力の発達段階などの個人的な次元での差も要因となっているが、このような知識集積型の教育のあり方を問い直していると言える。

そこで、学びの場での他者を匿名性のものではなく、目に見える具体的な他者へと換える試みが重要となる。これが、今回の大陸間教育を創る最も基盤になった理由と言える。

そして、他者が具体的に登場することによって、教師や教科書の知識を一方的に伝達する学習ではなく、文化実践型の構造へと教室の基本構造を変革することにもつながるのである。ただし、この具体性への学びの転換は、留学生を学校に呼ぶプログラムなど、様々な試みがなされてもいる。ただ、価値ジレンマや問題次元への学びの深まりなどが引き起こされない学習では、他者が具体化されたとしても、その他者は、学習者の先見的な認識や価値を崩し、相手の立場に立った理解にまで至ることが難しいのである。それ故に、今回の試みでは、グローバル 이슈でもあり、ローカルな問題でもある「水問題」を扱った理由の一つである。

そして、匿名性から具体性への学びの転換の大きな障壁になっていた壁が、21世紀に入りやっと国境を越えた移動やインターネットやスカイプ、スクラッチ等の ICT の進歩など、大きな時代の変化の中で、壁が低くなってきたのである。ジェラード・デランティは、グローバル化は、「時間が短縮するにつれて空間が障害になることは少なくなり、時間と空間をめぐる認識の変化は、世界を解釈する文化的モデルを転換」させ、グローバル化を「地理的に制約されていることが漸次的に重要でなくなる現象」と空間認識の転換ととらえ、近代化は国民国家によって主導された過程であったが、グローバル化は「その国民国家を侵食してきた」と指摘しているのである<sup>6)</sup>。

この日常的な準拠の壁が著しく低くなり、壁を乗り越え、空間認識の変革さえ引き起こされる時代になったのである。

1990年代初頭においては、宇宙船地球号プログラムをはじめ、グローバル教育において、地球的な視点やホリスティックな視点を持つこと、Think globally, Act locally という自分の地域における世界を見出すことは、たいへん意義のあることであった。しかし、今までに見てきたような学びにおける根本的な課題もあったのである。

#### 4. 大陸を越えた交流支援活動のスタート

今回、大陸間教育を構想する契機となったアジアの日本とアフリカのブルキナファソ、オセアニアのオーストラリアという大陸を越えてつながり合った小学生の取り組みについて述べてみたい。

まず、ブルキナファソとのつながりの発端は、東京の白金の子どもたちが、旧住民と新住民の対立を乗り越え地域の再生をめざした大人たちと一緒に地球子ども広場プロジェクトとして、ブルキナファソ支援の活動を行ったことである。この活動では、2009年3月に、世界銀行と JICA のテレビ会議システムを使って地球授業（グローバルレッスン）を企画し、私自身も教師役として参加した。そして、名古屋での取り組みに発展し、大陸を越えた交流教育になっていったのである。



そして、椙山女学園大学附属小学校は、オーストラリアのパースにあるグーレラル小学校とホームステイプログラムの交流を長年続けてきていた。また、ブルキナファソとは、2010年に椙山小学校の机とイスを贈り、それを機に、首都ワガドゥグーにあるル・クルーゼ学園小学校と交流をするようになったのである。

この交流活動を学校同士の学びやカリキュラムにおいてもつなげるきっかけになったのが、それぞれの地域で問題になっていることと地球的な課題をお互いに認識し、共通テーマとしてつながったことである。

それは、2012年の1月下旬にブルキナファソを訪ね、ブルキナファソの砂漠に近い北部地域での水問題の深刻さを目の当たりにした。その時、ル・クルーゼ学園を訪問し、当学園が水問題として、フランスと協力し合っていることを知ったことが大きかった。

また、8月に、オーストラリアのパース近郊の農業地帯や牧場、ダムなどを訪ね、そこでの水問題、中でも塩害の実態を調べることができた。そして、この地域の小麦が日本のうどんに最も適しており、日本に輸出されていることも分かり、パースの問題は、日本の生活にも関わることが明らかになった。そして、現地調査の中で、カルグーリという内陸部の金鉱山の町へ水を供給するための700kmに及ぶ長いパイプラインを建設した時の悲劇等、水を取り巻く様々な問題が見えてきた。

また、椙山小学校では、東山動物園の絶滅危惧種のメダカを守る「東山メダカプロジェクト」に参加し、メダカの生育環境の変化と水田の減少など、地域の環境保全と歴史調べなど、水と関わる活動も行ってきた。さらに、地域調べとして、愛知県は、伊勢湾台風や東海豪雨などの風水害、三河地域の水不足の実態や干ばつへの過去の苦しみから明治用水、愛知用水、豊川用水の建設がなされたことなど、たいへん水と関わっていることも分かった。このような背景から、これらの学校が共通に抱える問題であり、これからの地球的課題として水問題が大きく取り上げられていることもあり、グローバルな問題であり、ローカルな問題でもある、つまりグローカルなテーマとして「水と生活」を設けることとしたのである<sup>7)</sup>。

水問題に焦点を当てて調査し、具体的な交流活動を検討、協議をするために、2012年の10月下旬に再びブルキナファソを訪問し、ダムや首都ワガドゥグー市の水道システムを調査したり、農村の浅井戸や深井戸の実態を見て回ったりした<sup>8)</sup>。その後、ル・クルーゼ学園小学校を訪問し、フランスの学校と協力して行っている水問題へのプロジェクト活動をフランス側の担当者のエストナー・パトリック氏から直接説明を受け、子どもたちのプレゼンテーションを見せてもらった。ここでの活動に、日本側も参加し、そして、オーストラリアともつなげることによって、アフリカ・アジア・オセアニア・ヨーロッパの4つの大陸間交流になることを提示したら、たいへん興味関心を持っていただき、より具体的に話を進めることになったのである。

オーストラリアのグーレラル小学校とは、子どもたちのホームステイプログラムに合わせて、パース近郊のダムとパイプラインについての学習を日本の児童とグーレラ

ル小学校の児童がいっしょのバスに乗って、エクスカーシオンプログラム（現地学習）を実施した。

このようにして、より具体的に、アジアの日本、オセアニアのオーストラリア、アフリカのブルキナファソ、そして、ヨーロッパのフランスの子どもたちがつながり始めたのである。

## 5. 大陸間教育とその可能性

今や ICT が急速に発達し、個人レベルでも、スカイプ等によりテレビ会議は可能であり、様々な試みもなされるようになった。

この ICT を使った事例として紹介したいのは、宮田義郎、亀井美穂子らによって実施されているグローバルな協同制作実践「ワールドミュージアム (World Museum)」である。宮田らは、「21世紀に入った現代、地球規模に拡大した生活基盤と、それに対応する視野の狭さとの間に、大きなギャップが生じている。」と述べ、近年の ICT による情報伝達の質と信頼性の向上に伴い、10カ国以上が継続的に連携し、ワークショップやオンライン・コラボレーションによる協同制作を行っている。この実践の中で、参加者が次第にパートナーの人や文化に関心を持って参加するようになり、これらの過程を構築主義の視点から宮田らは、「構築的マインドセット」と提案しているのである<sup>9)</sup>。大陸間交流プロジェクトも、宮田らと共通点が多く、協力して実践を図ろうとしている。

大陸間教育は、Intercontinental Education として外国において検索しても、小中学校段階のカリキュラムや実践は出てこない。しかし、従来の国際理解教育やグローバル教育を基盤にしながらも、子どもたちの態度形成の視点や地球の現実を知り、行動し参画すると言う本当の意味でのグローバル人材の育成において意義のある教育として試みる価値があると考ええる。

大陸間教育は、学びの場そのものである学びのステージを地球規模まで拡張し、様々な多様性を持ち、多くの課題を持つ各大陸の子どもたち同士が、匿名性ではなく実名性としての具体的他者としてお互いに知り合い、問題を出し合い、課題解決に向けて取り組む教育である。そのつながり合う方法として、ICT を有効に使用したり、実際に国境を越えて移動したりしながら、各自の学びのステージで学び合うのである。

今まで、日本では、グローバルイシューを扱う学習において、HP で調べたり、本で調べたりしながら、匿名性の情報をもとに地球的課題を捉える傾向が強く、その結果、知識の集積だけで態度形成まで至らない傾向もみられた。しかし、大陸間教育では、アフリカはアフリカの子どもたちが調べたり、活動したりしている情報や知識について、具体的な姿や名前を知り合った子どもたちが提示したり、共に出会ったりしながら学び合うのである。そして、一つの大陸だけではなく、複数の大陸同士のつな

がりをもって、共通テーマについて学び合うのである。

これは、国際理解教育においても、日本国内から匿名性の情報や知識を獲得して地球的課題としてきた学習から、各大陸の具体的な人から得たり学び合ったりする中に、各大陸のローカルな問題が集まってきて、グローバルな問題として学び合う学習へと大きく変わることになるのである。まさに、グローカルイシューの学びと言える。

また、自らの大陸内においても、国境を越えて、より連携し合い、協同プロジェクトを生み出していくのである。これは、まさに、グローバルな活動、リージョナルな活動とつながり、ナショナルなつながり、ローカルなつながりを持った活動も可能なのである。

## 6. おわりに

今回、日本と各大陸とつながり合いながら実践をしてみて、お互いに教師や教育の在り方自身も大いに見直す契機になった。

オーストラリアのエクスカッション（現地学習）を取り入れた学習は、教室での知識学習とつながっており、水に関するTSTにおいても子どもたちの知識と態度形成のバランスのとれた意識として現れていた。また、ブルキナファソのプロジェクト学習は、実際に現地に出かけ、問題を見つけ、それを解決しようとする強い実践への意志が見られ、日本の学校が学ぶべき点とも言えた。不衛生な水を飲まざるを得ず、健康被害にあっている人々を救うために、リアルな問題として切迫感を持って、フランスの学校まで呼びかけ、大陸を越えたプロジェクトを展開しているのである。実際にブルキナファソの学校で、児童たちからその発表を聞いた時、たいへんな驚きであった。また、フランスの学校は1校だけではなく、地域の10の学校が連携してプロジェクトを推進しているのである。はっきり言って、日本からこのプロジェクトは呼び掛けたが、教科教育中心の取り組みも重要ではあるが、これからの21世紀を生き抜くためには、学びの内容だけではなく、学びのステージ自体を地球規模に拡張し、具体的に出会い、学び合う教育を創ることが重要であると痛感した。

そして、今、名古屋地区の小学校同士の連携、団地や商店街など地域との連携、そして、世界中にある日本人学校同士をネットワーク化した取り組みなど、大陸間教育を進めるプロジェクトづくりをめざしている。

### ■引用文献

- 1) Graham Pike and David Selby : *Global Teacher Global Learner* (Hodder and Stoughton), pp. 43-48, 1988年
- 2) 宇土泰寛：『地球号の子どもたち 宇宙船地球号と地球子供教室』, 創友社, pp. 94-111, 2000年
- 3) このデータの元になる「宇宙船地球号プログラム」の最初の実践は、東京都の公立小学校（授業者は山下亜子教諭）5年生の31名の児童を対象とした。調査方法として、マンフォード・クー



- ン [Manford H. Kuhn] の開発した調査法である TST [Twenty Statements Test of Self-Attitudes] 法「自己態度についての20回答法」を使用した。
- 4) Lawrence Kohlberg, “Stage and Sequence: The Cognitive-Developmental Approach to Socialization”, in David A. Goslin (Ed.), *Handbook of Socialization Theory and Research*. Rand McNally, p. 398, 1969年
  - 5) アルフレッド・シュッツ (森川眞規雄・浜日出夫訳) : 『現象学的社会学』, 紀伊国屋書店, p. 226, 1980年
  - 6) ジェラード・デランティ (佐藤康行訳) : 『グローバル時代のシティズンシップ 新しい社会理論の地平』日本経済評論社, p. 160, 2004年
  - 7) 宇土泰寛 : 『ユネスコスクールにおける ESD 「宇宙船地球号スクールプロジェクト」研究——宇宙船地球号 水と生活の旅』, 2013年
  - 8) 宇土泰寛 : 「水問題の解決に向けた大陸間の教育活動——日本・オーストラリア・ブルキナファソの交流プロジェクトをめざして」, 相山女学園大学教育学部紀要, 7 : 91-102, 2014年
  - 9) 宮田義郎・杉浦学・亀井美穂子 : 「ワールドミュージウム——志を広げる多文化異年齢コラボレーション」, 日本教育工学会論文誌, 37 : 302, 2013年